

魔法のプロジェクト FY23 活動報告書

報告者氏名: 酒井康次 所属:大阪府立思齊支援学校 記録日:2024年2月28日
キーワード:見通し,見る場所

【対象生徒の情報】

・学年:高等部1年生

・障害名

知的障がい(療育手帳B1:中度)

検査:ASA 旭出式社会的硫黄スキル検査(R5.4) 全検査スキル 5歳後半

言語スキル 4歳前半 日常生活スキル 6歳前半 社会生活スキル 6歳前半 対人関係スキル 7歳前半

・障害と困難の内容

- 1 予定や時間、場所など、見通しが持てず教員に確認をすることがほとんどである。
- 2 理解すると一人で取り組んだり行動に移したりすることができる。
- 3 授業や課題の際に、書き写す取り組みになると、どこを写したら良いか分からず、困る場面が多い。
- 4 自分の思いを伝えることはできるが、意図のやり取りや相手に分かりやすく伝えることは難しい。
- 5 相手が大人なら本人の思いを汲み取って会話を成立させることができるが、友だちとの会話になると、意図のやり取りが噛み合わず、中途半端に終わることが多い。

【活動目的】

・当初のねらい

- ◇ 困り感(以下の1.2.3.)について、少しでも解消をしたい。
- ◇ 周囲の人からサポートをもらえることが多くあるため、本人にとっては困り感が少ないと考えるが、自分で何とか解決しようとする気持ちをはぐくみたい。また、サポートの量を減らすことで少しでも自立を促したい。

(箇条書きの内容はそれぞれの考えられる困り感の推測である。)

1. 見通しを持ちにくい。

- 時間割表など、表の見方が分からない？
- 記憶の保持の力が弱い？
- 言葉の語彙数が少ない？
- 時間や場所を把握する力が弱い？

2. どこを見れば良いか分からない。

- 黒板を見て手元のプリントに写す際に頭を上下すると写す所が分からなくなる？
- 板書で書かれている見本の内容とプリントの書かれ方が違うため、どこに書いたら良いかわからない？

3. 感想など、発表するときに止まってしまう。

- 緊張する？
- 言葉を知らない？
- 記憶の保持が難しい？

・実施期間:R5.5月~R6.2月

・実施者:報告者

・実施者と対象生徒の関係:クラス担任、授業担当者

【活動内容と対象児の変化】

・対象生徒の事前の状況

○学校生活について

- 皆勤に近い出席率。
- 友だちも多く、クラスや休み時間など、友だち同士でコミュニケーションを取る様子が見られている。ただ自分の好きなことなどの話が中心で、意図のやり取りという点では少ない。
- 授業では視力が悪いので最前列に座席を用意している。
- 手元に見本を置き、それを見ながらだとひらがな、カタカナ、漢字を丁寧に書写することができる。また塗り絵も線をはみ出すことなく、とても上手である。
- 運動を苦手にする様子が多い。体が硬い、筋力が弱い、動きの模倣が苦手。
- 失敗したり、間違ってりしてしまうと、表情が暗くなりそのことを引きずってしまう。教員がフォローすると、気持ちを切り替えて行動することができる。

・活動の具体的内容

見立て	困る場面	困る場面の具体的エピソード	iPad を使用しない指導・支援方法	iPad を利活用した場面
見通しについて	登校時、朝の会など	・毎時間「次の時間(の授業)、何?」と聞く。 ・「(教室の)場所どこ?」 ・「今日、どこ(を昼休みの場所)使える?」	・その都度、時間割表などの見方を説明し、指差し等を実施。	・実施せず。(※)
見る場所について	授業、日直当番など	・板書を書くように指示されても鉛筆を持ったまま書けない。 ・困った表情。 ・「分からん」と質問する。	・同じプリントに見本を記入して提示。 ・1つ1つ細分化したものを司会時に使用する。	・カメラ機能を使い、板書や見本のプリントを撮影したものを拡大したり、ラインを引いたりして分かりやすくする。 ・自クラスのみ使用のため細分化した用紙のみで対応。
発表について	授業・終わりの会など	立ったままで、無言になる。	・一日の授業を(確認させ)聞き、授業を指定する。 ・どんなことをしたのか具体的に聞く。	・印象的な場面を写真や動画に撮っておき、見返して思い出せるようにする。

活動を通す中で読むことへの困り感を持っていることも把握したので、追加で以下も実施。

読みの難しさについて	書かれている内容が読めない	・平仮名でも拾い読みになる。 ・質問しても「分からん」と答える。	・教員が先に書かれている事柄を単語や文節ごとに読み、そのあとに読ませる。	・問題を読み上げる機能がある学習アプリを利用する。
------------	---------------	-------------------------------------	--------------------------------------	---------------------------

※ iPad のカメラ機能で時間割や表などを撮影し自分で見るように環境整備することも考えたが、どの場所にも同じ時間割表があるので、実施をしなかった。

見る力を養うことも必要と考え、iPad のアプリ(かずかぞえ・ビジョンパーク、すくすくプラスの主に 3 つ)を用いて見る力のトレーニングを数学の授業の中で実施した。

かずあそび、ビジョンパークは 5 月～10 月で実施。週 2 回の授業の中で毎回 10 分程度実施。



数字・数え方の幼児向け知育アプリ！かずあそび
Kazue Kuga

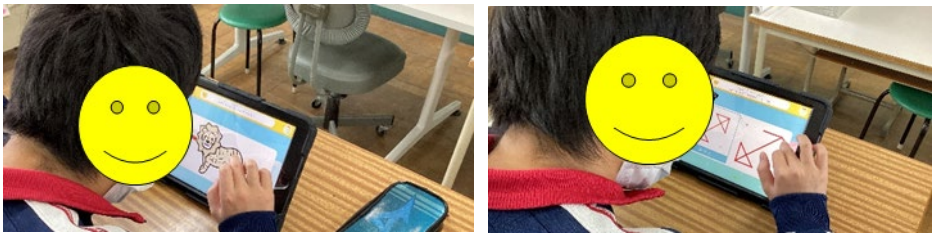


ビジョン・パーク
WAKASA SEIKATSU Corporation



すくすくプラスは 10 月～2 月で実施。週 2 回の授業の中で毎回 15 分程度実施。



ひらがなカタカナの練習 子供向け知育ゲーム すくすくプラス
ひらがなをなぞり 足し算で学習 幼児向けアプリ もじと迷路



<1.朝の会時での場面>

	<p>朝の会時で司会を進めている場面。</p>
	<p>時間割の発表後、司会表を見るも表裏を間違っていることに気付かない。そのまま進めようとして困ってしまい、担任に指摘される。</p>

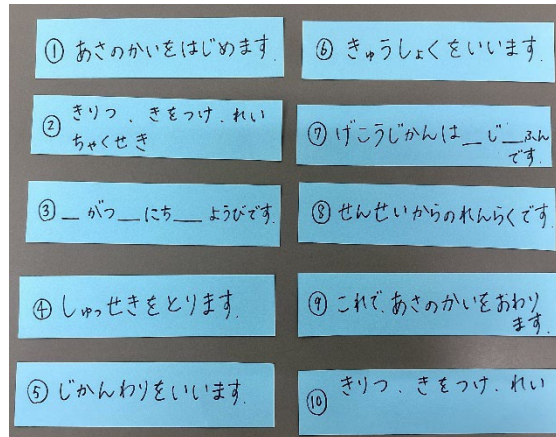
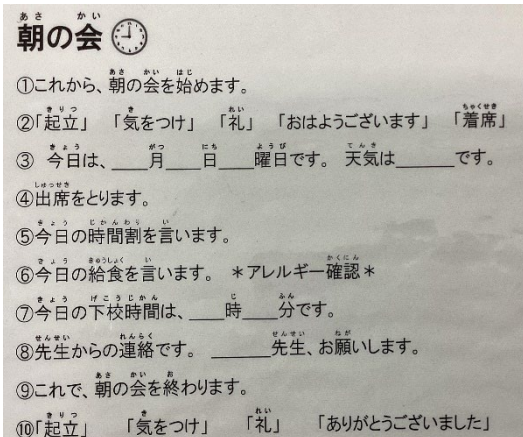


中段写真の続きで、司会表を持ち替えたが、どこまで進めたかが分からなくなり、担任にフォローしてもらう場面。



担任と一緒に時間割を確認している場面。始めはどこを見てよいか、どのように発表すればよいか分からなかった。担任から指差しをしてもらい、また一緒に言うってもらうことで司会を進められていた。

<2.見る場所についての例>



司会表を細分化し、項目ごとに渡して発表させることも取り組んだ。

左図写真の裏側には終わりの会が載っている。

<3.発表についての例>

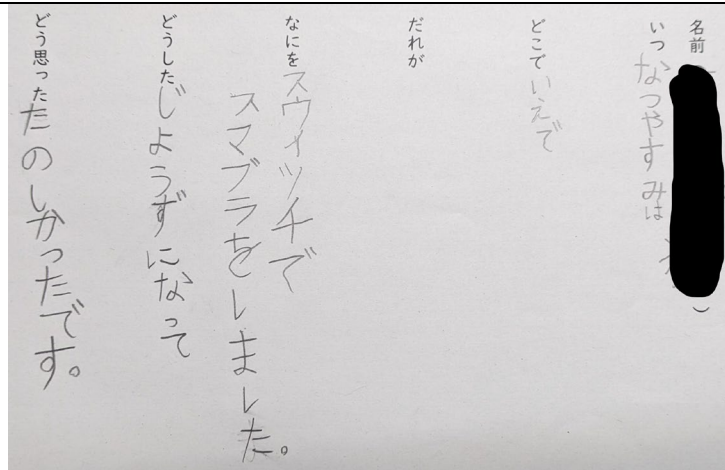
〇5月ごろの様子



『よどがわのさんさく』
ともだちと、おはなしをしたのしかったです。』

作文を書き、発表した。この内容に1時間(40分間)をかけた。テーマは楽しかったこと。夏休み前の学年集会で発表することになり、考えた内容である。担任と話をしながら実施した行事を振り返り、内容を決めた。そこから、さらに話を聞き取り、書く内容を絞った。担任が見本を書き、それを書き写す形で仕上げた。

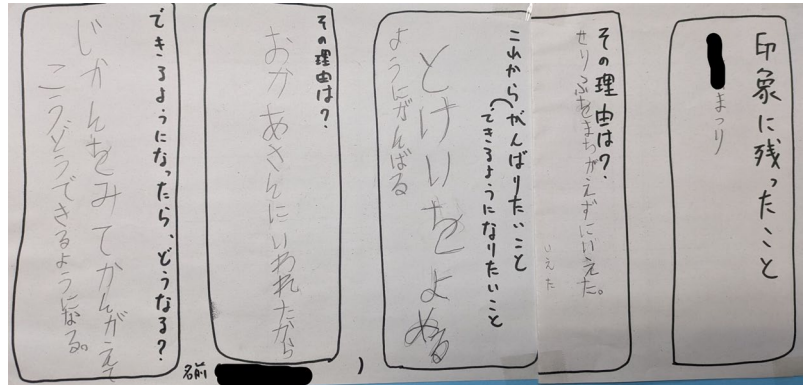
〇9月ごろの様子



なつやすみはいえでスイッチでスマブラをしました。じようずになてたのしかたです。

夏休みの思い出を書かせた内容である。担任と夏休みの思い出の話をしている中で、「これにする!」と決めて、素早く書き終えた。書いた内容について、ほとんど修正する点がなかった。

〇12月ごろの様子



〇〇まつり
せりふをまちがえずにいえた。

とけいをよめるようにがんばる。
おかあさんにいわれたから。
じかんをみてかんがえてこうどう
できるようになる。

12月初めに実施した学校の学習発表会(演劇)を終え、冬休み前に行う学年集会で発表する内容を考えたものである。右側の『〇〇まつり』については、自身の力のみで書き上げた。また左側の『これからがんばること』では、「何を頑張る?」と聞くと、「時計を読めること」と答えたのち、担任が設問を読むだけで、質問に対してスラスラと書き上げた。

・対象生徒の事後の変化

見立て	指導・支援後の様子
見通しについて 見る場所について	<ul style="list-style-type: none"> ・時間割表など慣れてくると、自分から知ろうとする様子が見られた。また分からなければ、担任に聞くことが増えた。 ・日直当番はひらがな表記に変えたものを使用しても、定着せず一人で進めることができずにいた。隣で始めの言葉を伝えるとそれ以降は一人で読めるが、支援なしには難しかった。
発表について	<ul style="list-style-type: none"> ・担任が授業に入っていて、具体的なシーンを知っている状況で細かく本人に質問すると、返答する形で発表できた。 ・特に印象に残っているシーンやエピソードがあれば、がんばったことを簡単にひ

とりで発表することができた。

・写真や動画を見返して、そのときのことを振り返ったのちに発表すると「〇〇のところをがんばった」など、より具体的な場面を取り出して発表することができた。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

【当初のねらい】の3点について取り組む中で、視覚よりも聴覚の方が優位なことが感じられた。それまでiPadを使う場面では、周囲の生徒への配慮もありできるだけ音量を下げた状態で見たり聞いたりするように指示していた。その時の取り組み方は、“当てずっぽうでタッチすればどれかは合う”といった様子の取り組み方だった。聴覚優位と見立ててからは、音量を上げ「問題(の読み上げ)を最後まで聞いてからやってみて」と、伝えてから取り組ませると、聞いて、考え、判断して取り組む様子に変化した。

・エビデンス(具体的数値など)

3点の支援を通して、困り感を軽減できたと考えられる。その理由として、本人からの質問回数の減少や、笑顔が多く見られることからである(年度当初はほぼ毎休み時間に次の授業名の確認を求めている)。場所的、時間的な環境への慣れ、人(友だち、教員)への慣れ、支援(方法)への慣れが相互に影響し合ったからだと考える。

また作文に40分間かかっていたのが、12月になると15分間程度で作文を終えることができた。印象的なシーンや写真・動画など、イメージが残っている、もしくはイメージを再度作り直すことで言葉が出るスピードが速くなったと考えられる。